

氏名	おおたにせつこ 大谷節子
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	論文博第 451 号
学位授与の日付	平成 15 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目	能の構想論

論文調査委員 (主査) 教授 日野龍夫 教授 木田章義 助教授 大谷雅夫

## 論文内容の要旨

第一章「能における「心」と「理」は、本論の序章にあたる。世阿弥の能に顕著に見られる「心」と「理」をめぐる問答について、貴賤逆転の構図を基にした本説の解き明かしによって能が構想されていることを指摘する。

### 第二章

一「世阿弥の「脇の能」は、物狂能と並んで、世阿弥がその定型の完成に大きな役割を果たした「脇の能」についての論考で、第二章の総論にあたる。「脇の能」「脇」は、現在「脇能」と呼ばれる能にはほぼ該当する世阿弥の用語である。「脇能」は、「神能」と同義に用いられることもあるが、これは、「脇の能」の多くが神の出現する能であるために起きた混用であり、本来世阿弥のいう「脇の能」とは、祝言を主眼とする「初番の能」の謂であった。よって本稿では、こうした世阿弥の意図を明確にするために、通行の用語ではない「脇の能」の称を用いている。世阿弥の「脇の能」は、古今和歌集仮名序ならびに仮名序注の引用や、『教訓鈔』等に見られる舞楽説話に基づく舞楽名の列挙によって、主眼(主題)である祝言性を表現している。これは、世阿弥が『毛詩大序』を引用して『五音曲条々』に記す、治世の音曲、安楽音を祝言とし、治世と祝言の楽の繁栄を一体とする理念、あるいは、『毛詩大序』の影響下にあることが既に指摘されている『古今和歌集仮名序』が示す、和歌の繁栄と治世の安泰とを一体化した統治理念の継承、投影と見ることができる。また、そもそも「脇の能」に祝言性が求められた理由については、既に世阿弥の頃には衰退・省略の傾向にあった「翁」(天下泰平寿命長遠の祝禱芸)の代替という意味合いがあったことを推論する。

### 第二章

二以下は、世阿弥の「脇の能」の作品論である。「難波梅」考では、世阿弥自筆本が現存する「難波梅」(現行名「難波」)を取り上げ、シテ王仁と、ツレ梅の精(後場、木華開耶姫の神霊)の設定、ならびに人物造型が、『古今和歌集仮名序』の注釈書類に基づいていること、後場で王仁が春鶯囀を舞う設定は、春鶯囀をめぐる舞楽説話に基づいていることを指摘する。そして、唐物の能でもある「難波梅」は、和歌と舞楽の繁栄が治世と一体であるという当時の和歌観、舞楽観を反映させることによって「脇の能」としての祝言性を表現した、最初の能であった可能性について言及する。

### 第二章

三「弓八幡」考では、『申楽談儀』に「当御代の初めのために書きたる能」と記される、世阿弥作の脇の能「弓八幡」を取り上げた。この作品では、石清水八幡の如月初卯の神事に参詣した後宇多院の院使を通じて、錦の袋に包まれた桑の弓が献上されるが、このような儀式が同神事に行われていた形跡はなく、『礼記』射儀に見える「桑弧蓬矢」と、『詩経』周頌、時邁篇の「載敢干戈、載裹弓矢」を組み合わせて、桑の弓を錦の袋に包んだ作り物(能における小道具)を案出した、世阿弥の作であることを論証する。また、「弓八幡」では、この作り物が院使を通じて「君」に献上され、八幡神による当代守護の誓いが伝えられる。つまり、「弓八幡」は、君を守護し天下泰平国土安穩を約諾する八幡神の神託が、化現した高良神によって院使に伝えられ、院使がこれを君に奏上するという構想の能であり、これは天皇の御願祭祀である石清水臨時祭、あるいは代始め儀式として行われていた石清水行幸に見られる、神事儀式的形式を取り込んだものであることを述べた。

## 第二章

四「鵜羽」考では、世阿弥作の女体の「脇の能」を取り上げた。世阿弥作の女体「脇の能」には、「鵜羽」「箱崎」「布留」「右近」があるが、いずれも廃曲となるか、もしくは後人によって大幅に改作されており（「右近」信光改作）、「脇の能」の本流から淘汰された作品群といえる。「鵜羽」は、『古事記』や『日本書紀』に記される、彦火々出見尊と豊玉姫の神婚、ならびに鸛草葺不合尊出産の話であるが、中世では、生まれた皇子の名は鵜羽葺不合尊と呼ばれていた（『彦火々出見尊絵巻』鎌倉期成立、現存本は模写本。等）。「鵜羽」は、この鵜羽葺不合尊の「御誕生日」に当たって行われる神事を眼前に現す能である。前述の『彦火々出見尊絵巻』他、日本書紀の注釈書類にも「御誕生日」の神事についての記述は見えないが、鵜羽葺不合尊生誕時に同じく産屋に鵜羽が葺かれた神功皇后の御産の話を記す『八幡宮縁起』諸本の中には、皇子（応神天皇）生誕の日に「御誕生会」という神事が行われることが記されており、これは、元来は応神天皇の後の出産の話がスライドした可能性が高い。中世の八幡縁起では、三韓出兵前夜、神功皇后は干満二珠を娑竭羅龍王から借りるために、胎内皇子を龍女の娘の婿とすることを約束したと記され、『八幡宮寺巡拝記』等は、この龍女の産屋が鵜羽で葺かれていたことに言及する。このように「鵜羽」は、中世の八幡縁起の中の神功皇后譚をも重ねて、干満二珠の奇瑞を現出させ、龍女がこれを国の宝として捧げる「脇の能」として構想されているが、龍女成仏の要素が混在し、演出資料からも手に経巻を持った龍女が登場し天女の舞を舞ったことが知られている。天女の舞は龍女成仏を主題とするものであり、「鵜羽」の原型は僧都より御法を得て天女舞を舞う能であったことが推測されている。現存の謡本の形は、「鵜羽」と詞章の上でも影響関係が指摘し得る同材の作品を残す、信光や長俊の改作の可能性はあるが、前場と後場は上述のように八幡縁起を媒介にすれば矛盾はなく、世阿弥の原作においても後場に干満二珠が語られていたことは疑いない。同じく女体の「脇の能」で、世阿弥自筆本が現存する「布留」は、その演出表記によれば経巻を持っておらず、犬王より天女の舞を導入した世阿弥が、女体の「脇の能」を確立する過程には、天女の舞の属性であった龍女成仏の枠組みからの脱皮が必要であったと推測される。前場の鵜羽譚と後場の龍女成仏の要素が異質なままに共存する「鵜羽」は、龍女成仏の要素を全く持たない女体の「脇の能」「布留」へと至る過程に生み出された作品として位置付けることができる。

第三章一「物狂能の変遷」は、物狂能に属する能の古写本を調査し、辿り得る限りの原型に基づいてこれを分類対比し、物狂能の大半を占める別離再会譚を構想の骨格とする物狂能が、譚としての一貫性を切り捨てつつ、歌舞性の高い作品へと変質していく過程を明らかにし、これに世阿弥が大きく関与したことを述べたものである。

第三章一二「物狂能の意味」は、世阿弥の物狂能が、物狂（狂人）を単に異常な状態と見なすのではなく、人間的情念の高まりと捉える認識のレベルにまで到達した上で、人間性の発露の表現に恰好の題材としてこれを用いたものであることを明らかにしたものである。世阿弥は、物狂（狂人）には「神・仏、生霊・死霊」などが取り憑いて狂う（憑き物故の物狂）と、「親に別れ、子を尋ね、夫に捨てられ、妻に後るる、かやうの思ひに狂乱する」（思ひ故の物狂）とがあると記している（『風姿花伝』第二物学条々・物狂）。狂気の原因に、別離、喪失を契機として引き起こされる心因性のものがあることを明示したものであり、物狂に関するこのような世阿弥の視点は、それ以前の文献で把握し得る物狂への理解に比して格段に合理的、且つ、思索的であり、こうした物狂像は以後の文学作品等に強い影響を与えている。

第三章一三「物狂能遡源」は、〈思ひ故の物狂能〉の構想の淵源を辿り、説経、法話の種本であった説草、あるいはそれを収録した説話集などの唱導資料に見られる出家因縁譚（出家や身売りをめぐる、孝養と恩愛の葛藤と大団円の結末をもつ因縁譚を私に仮称した）の類型から生まれたものであることを跡付けた論考である。

第三章一四「敷地物狂」考と、第三章一五「梅枝」考は、第三章物狂能論における各論の形を取るが、いずれも世阿弥による物狂能の定型確立後の作品を考察の対照としている。「敷地物狂」は禅竹作の可能性の高い作品であり、「梅枝」は作者不明であるものの、禅竹作の可能性もある物狂能「富士太鼓」を夢幻能仕立てに改作した後代の作である。世阿弥以後の物狂能が如何に既存の物狂能を換骨奪胎し、新しい趣向を加えて作られたものであるかを論じた。

第四章は、脇能、物狂能以外の作品の構想を、他の文学作品との関わりにおいて論じた章である。一「世阿弥と禅」は、世阿弥に能楽論に強い影響を与えた禅が、その作品には具体的にどのような形で影響を与えているかを、康永元（1342）年に五山版として刊行された『夢中問答』との関わりにおいて考察したものである。

第四章一二「伊勢物語古注と能」は、能の素材の源泉であった平安朝の文学作品を、世阿弥が如何に構想して、能の作品

を生み出したかを、「世阿弥自筆本「ウンリンイン）」と、「井筒」を例に論じたものである。i「雲林院」は、世阿弥の父、観阿弥時代の役者金剛権守が演じていた古作の存在が知られているが、これに手を加えた世阿弥の自筆本が現存し、さらに、室町後期以後の写本は、これとは大きく異なった本文を有している。従来、前後の一貫性の無さが問題にされてきたが、前シテを住吉明神と解釈することで、自筆本の段階での整合性が見出せることを指摘した。また、変遷を繰り返した「雲林院」史の中で、世阿弥自筆本の形は、「葛の袴」や「住吉遷宮の能」（現存せず。『申楽談儀』によって一部の詞章が伝えられる）では住吉明神が語った伊勢物語秘伝を、二条后と基経が体現するものであるが、二条の後の物語が罪の物語として語られる点が、それ以前の形式を大きくはみ出す所であり、「通小町」や「恋重荷」など、女性の邪淫戒破戒を責める鬼がかりの能として構想されていることを指摘する。

第四章—ii「井筒」考」は、世阿弥の代表作「井筒」の作品研究である。従来、能と注釈に関する論は、作品の典拠を指摘するに留まるが、本稿においては、世阿弥が『伊勢物語』古注を如何に組み替え、幽玄という室町美を生み出すに至るかを分析した。

第四章—三「和歌と能」は、古作「綾の大鼓」から「恋重荷」への改作の主意を和歌表現の観点から考察した論考である。綾で張った鼓の鳴らぬことを怨み死にして死霊となった「綾の大鼓」を「恋重荷」に改作するにあたっては、古今集誹諧歌を発想の起点として、老人の恋の苦渋の、比喩としてではなく具象として、巖を綾羅錦紗で包んだ「恋の重荷」を着想し、これを作り物として具現化し、さらに「恋の持ち夫」「恋の奴」などの恋の苦しみを詠む和歌表現によってシテの老人を造型していることを指摘し、和歌の比喩表現を舞台上に具現化するという世阿弥の方法の一例を示した。

第四章—四「連歌と能——規模のこぼ——」は、能の修辞法を連歌との近似性において論じたものである。犬井貞恕『謡曲拾葉抄』（明和九年刊）に二首指摘されるだけであった『菟玖波集』所収連歌の影響を再検討し、世阿弥の能楽論が二条良基の連歌論の影響を強く受けているように、能の詞章にも良基編纂の『菟玖波集』の影響が見られることを指摘し、連歌的表現と呼ばれている修辞法と能の修辞法との近似性を指摘した。さらに世阿弥が「規模のこぼ」と呼ぶ、作品名（あるいはこれに匹敵する重要語）との掛詞について、作品における位置、当座性を重視した連歌との共通性について論じた。

第四章—五「説話と能」 i 「恋重荷」考」は、「恋重荷」の構想の背景に、古今和歌集の秘伝書『古今和歌集灌頂口伝』の中で百夜通い説話からの連想で引用される術婆伽説話があることを指摘し、原典の『大智度論』から離れた術婆伽説話の中世の変容の諸相を見、能「恋重荷」がこれに拠っていることを論証した。また、後シテが結末において「葉守の神」となる設定について、同じく身分の低い者が叶わぬ恋によって死に至る『源氏物語』の柏木の物語が秘められていることを指摘した。

ii 「東方朔」考」は、禅鳳の脇能「東方朔」の構想の背景をめぐる考察である。東方朔は日本の中世において種々の相を以て語られるが、この中には、西王母と対等に位置する東王父（東王公）を東方朔と混同し、置換した理解が見られる。能「東方朔」において、仙人を名乗る東方朔が西王母を呼び出し合舞を舞う構想には、こうした東方朔像が反映していることを指摘する。

第五章能の背景「合身する人丸——和歌秘説と王権——」は、人丸をめぐる秘説、ならびに『古今和歌集』そのものが、王権の「守り宝」となり、醍醐天皇以後歴代天皇に継承される架空の相伝血脉を持ち、三種の神器と共に即位儀礼の道具として記述されるようになる様相を辿り、和歌秘説と王権の問題について考察した論考である。能を直接に対照とした論ではないが、人丸と「ほのぼのと」歌が和歌と治世の一体化を象徴する役割を果たしていったことは、第二章に記した世阿弥の「脇の能」の背景に繋がる事象である。

## 論文審査の結果の要旨

能は、総合芸術とも、伝統芸能とも呼ばれる如く、文学以外の諸要素をも併せ持つことが禍し、日本の古典文学における重要な研究分野であるにも関わらず、その研究は著しく立ち後れていると言わざるを得ない。本論文は、そうした状況の中であって、実証的な国文学研究の方法論に立脚し、かつ能の源泉となっている仏教経典、物語、和歌、連歌、軍記、説話等々の他分野の綿密な考察をも合わせ行うことにより、能の文学的側面に関する研究方法の1つの模範を提示した、というに足りる成果を挙げている。

成果を具体的に示せば、まず第1に、世阿弥がその定型の完成に大きな役割を果たした「脇の能」と「物狂能」について、淵源と定型の形成過程、ならびにその変遷を詳細に明らかにした点が挙げられる。祝言を主旨とする「脇の能」について、論者は、本来、天下泰平、寿命長遠の祝禱芸である「翁」の代替として、「脇（二番目）」に配置されたものであり、世阿弥の「脇の能」の多くに、古今和歌集仮名序注や舞楽名が列挙されるのは、『毛詩大序』に基づく、治世と祝言の楽の繁栄を一体とする理念、あるいは、『毛詩大序』の影響下にある『古今和歌集仮名序』に示される、和歌の繁栄と治世の安泰とを一体化した統治理念の継承、投影と見る。能以外の諸分野にまで広く目を及ぼした周到な論証を踏まえた主張は、説得性に富む。

また物狂能については、その構想の淵源が法会、法話における唱導資料に見られる出家因縁譚の類型にあることを明らかにし、この別離再会譚の要素を次第に切り捨てつつ、歌舞性の高い物狂能が生み出されていく過程を論証した。壮大な見取り図の下に、緻密なテキスト調査を積み重ね、論理的に考証を展開したことによって、これらの能作品は初めて明確な輪郭を与えられたといえよう。

第二の成果は、能がそれ以前の文学作品を如何に摂取し、趣向として再構築しているかを読み解いた点にある。作品の注釈に関する従来の研究は、典拠を指摘するに留まるものが多かったが、第四章二「伊勢物語古注と能」ii「井筒」考においては、世阿弥が『伊勢物語』の古注を如何に組み替え、幽玄という室町美を生み出しているかを、当時の歌論や連歌論を元に分析する。同じく第四章三「和歌と能」、第四章五「説話と能」i「恋重荷」考においては、作品「恋重荷」が古今集誹諧歌を発想の起点とし、「なさぬ恋」の具象として、巖を綾羅錦紗で包んだ「恋の重荷」を着想した作り能であること、その構想の背景には、『大智度論』を淵源とする術婆伽説話があることを指摘し、さらに結末において後シテが「葉守の神」となる設定については、同じく身分の低い者が叶わぬ恋によって死に至る『源氏物語』の柏木の物語の隠喩であることを指摘する。こうした解明は従来の典拠論を大きく凌駕するものであり、能は論者によってようやく文学としての読みの対象に引き上げられたといっても過言ではない。

しかし、本論文にもなお望まれる点が幾つがある。たとえば、世阿弥時代の能の全体像を論述するためには、脇能や物狂能と並んで、世阿弥がその形成と展開に大きく関与した修羅能についても言及すべきであるが、本論文には「敦盛」の例を除いてまとまった記述が見られない。従来は平家物語との比較がなされる程度で、研究が停滞しているジャンルであり、新たな研究の視点の提示がほしいところであった。また、大和猿楽の根幹でもあった鬼能についても、第四章「本説と方法」において、「ウンリンイン」「綾鼓」「恋重荷」について触れてはいるものの、その全体像については明確な視点が欠けている。論者にとって今後の課題となるものであろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成15年2月18日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。